

直観についてのベルクソンの理論の発展

『物質と記憶』から『創造的進化』まで

野瀬 彰子(東京大学)

本発表は、何ゆえ直観がそれ自体で存在するものの知だとベルクソンが主張するのかを、『物質と記憶』から『創造的進化』(1907年)までの直観についての理論の生成及び発展を考慮にいれながら、解明することを目的としている。

われわれはそれ自体で存在するものを知っているのか。直観についてのベルクソンの理論はこうした認識論的問題に一つの答えを出す。それ自体で存在するものは、われわれの通常の認識の仕方では認識されないが、直観によって知られているのである。そして、『物質と記憶』(1896年)では、直観に立ち戻ることこそ従うべき方法だとされる(*cf.* MM 203-209)。

さらに、直観についての理論の解明は、生命についてのベルクソンの理論がいかに成り立っているのかを明らかにし、その理論の妥当性を検討するために不可欠である。『創造的進化』以降、ベルクソンは、自らの形而上学において生命(*la Vie*)に中心的な位置づけを与える。生命は、生けるものを創造し、生がないものをも発生させてきた始源とされるのである。ただし、生命についての理論は、直観についての理論を基礎として成り立つものである。それゆえ、生命についてのベルクソンの理論を解明し検討するためには、直観についての理論がいかなるものかをまず精確に捉え、その理論がどれほど妥当なものかを明らかにすることが必要なのである。

以上の背景から、本発表では、直観についてのベルクソンの理論の解明を目的とする。

とはいえ、直観についての理論は、『意識に直接与えられたものについての試論』(1889年)(以下、『試論』と略す)から何も変わることなく『創造的進化』まで受け継がれ、生命についての理論の基礎となっているわけではない。直観についてのベルクソンの理論は発展してきている。

そもそも、ベルクソンは、直観という語に、われわれの通常の認識から区別される知という重要な位置づけを最初から与えていたわけではない。ベルクソンは、持続についての考察から直観という方法が生成したが、直観という語を用いるのを長い間躊躇してきたと明示している(*cf.* PM 25)。それでは、持続についての理論から直観についての理論がいかに生成し、両者はいかに関係しているのか。

さらに、直観についての理論は、『物質と記憶』において生成した後にも、発展を続けていく。直観に立ち戻るといふ方法をベルクソンが明示したのは、『物質と記憶』においてなのだった。それゆえ、『物質と記憶』において直観についての理論が生成させられ完成したかのように一見思われる。だが、実は、『物質と記憶』における直観についての理論は、未だ発展の途上にすぎない。『物質と記憶』で示された直観がその後発展していくと主張する点が、とりわけ、先行研究に対して本発表の独自な点である。

本発表では次の点に注目し、直観についての理論の『物質と記憶』から『創造的進化』までの発展を明らかにすることを目指す。『物質と記憶』では持続しているものの知が直観だと考えられる。それに対して、『創造的進化』第3章において直観されているものとして挙げられる「弛緩(*détente*)」(EC 202, 203, 213, *etc.*)は、持続しているものとは厳密には別のものである。「弛緩」は、「緊張(*tension*)」(EC, 224, 237, 246, *etc.*)と対になって用い

られている語である。意識が自らの過去を現在へと縮約し持続していくようにさせるはたらきが、「緊張」である。もう一方で、意識は、持続するのを止め、持続とは反対の性格をもつ要素をつくり出しもする。そのように、持続を止め、持続することによって出てきたものを分割し、固定的で相互外在的な認識対象をつくり出す意識のはたらきが、「弛緩」である。持続しているものは、こうした2種のはたらきが混合してできあがるものである。『創造的進化』においては、持続しているものだけでなく、持続しているものを生み出す意識の2種のはたらきも直観されているものとして挙げられているのである。そうだとすると、直観を保持しているものの知と規定するのは正確でないということになる。というのも、持続しているものの知だけが直観の外延に入るのではないからである。そして、とりわけ「弛緩」についての直観が説明を要する。というのも、「緊張」は、持続しているものの一種と考えられるからである。持続は自己による自己の創造(*cf.* EC 7)である。意識を持続していくようにさせるはたらきは、持続している意識自身と別のものではないのである。それに対して、「弛緩」は持続しているものとは言えない。「弛緩」は、「緊張」の反対方向のはたらきである(*cf.* EC 202)。持続しているもの或いは「緊張」だけでなく「弛緩」もがそれによって知られる直観とは、いかなる知なのか。そして、直観とはいかなる知なのかを踏まえた上で、何ゆえ直観がそれ自体で存在するものの知とされるのかを解明する必要がある。

本発表では、まず、『物質と記憶』において、われわれの通常認識しているものの根底に直観されているものが在るということが、いかにして説明されているのかを確認する。それから、『創造的進化』第3章において、何ゆえ「弛緩」が直観されているものなのかを明らかにする。ただし、その際、『創造的進化』第3章における「緊張」と「弛緩」についての理論のみに注目するのではなく、『物質と記憶』における「緊張」についての理論が『創造的進化』までにいかに発展したのかも考慮に入れる。『物質と記憶』において、「緊張」についてはいくらか既に論じられているが、「弛緩」という語は未だ用いられていない。『物質と記憶』と『創造的進化』との「緊張」についての理論のあいだの相違から、二著作のあいだにいかなる発展があったと考えられるのか。そのことを、『物質と記憶』と『創造的進化』第3章との内容をそれぞれ明らかにし、比較しながら、解明する。そして、『物質と記憶』から『創造的進化』まで直観についての理論が発展してもなお、直観がそれ自体で存在するものだとされる所以を明らかにする。

かくして、直観についてのベルクソンの理論をその生成と発展を踏まえて解明する。そうして、直観についての理論をその根柢を含めて解明することで、それによって基礎づけられている生命についての理論を解明し検討する準備を整える。

[参考文献]

- Bergson, Henri, *Essai sur les données immédiates de la conscience*, PUF, 2011(1889) (=DI)
—, *Matière et mémoire*, PUF, 2008(1896) (=MM)
—, *L'évolution créatrice*, PUF, 2009(1907) (=EC)
—, *La pensée et le mouvant*, PUF, 2013(1934) (=PM)
Deleuze, Gilles, *Le bergsonisme*, PUF, 2007(1966)
Worms, Frédéric, *Bergson ou les deux sens de la vie*, Paris, PUF, 2004